

東アジア実学研究会 土着的近代例会

韓国・朝鮮思想、文化の土着的特質 邊英浩 Byeon Yeongho

I 土着性=外来思想の流入と韓国的な変容、受容

韓国・朝鮮に外来思想流入時に韓国的に変容させる磁場。韓国思想化の特質

1. 受容した思想階層秩序の頂点を目指す普遍志向が強い。

2. 個別化 (=気) の契機も強い。

・ 強大な中央集権国家の歴史不在：国内では地域の独立傾向・遠心力が強い、王権が相対的に弱く在地支配層の力が強い。

・ 遊牧民の東漸と朝鮮半島への定着 → 檀君神話（後述）

・ 契（ネットワーク）優位社会

日本：土地緊縛社会、移動しない、中国：強大な君主権力

韓国：移動活発、国境も超える（海外留学者の異様な高比率）。

土地に縛られない人間関係

象徴としての3。3太極図、三足鳥（火の鳥）社会。

※補足：韓国は契（ネットワーク）優位の社会 17C後の展開

	血縁	地縁	契など
中国	明末～清朝：血縁擬制→宗族（同姓氏族） 李・王は現在1億人ほど	現在の省単位？	なし？
日本	ほぼ無し	村落、県境が明確 1946年農地改革。 村落共同体解体後も移動に否定的。	弱い？無尽講
朝鮮 韓国	17世紀後半～宗族（同姓同本貫）展開。本貫は祖先の出身地。	1. (村落) 2. 郡県 3. 慶尚道 vs 全羅道 1970～	・ 水利契、山林契、頼母子（金融）契など多数 ・ 教会、同窓会 ・ 現代 Inter net の café

※韓国：宗族（同姓同本）、地縁共同体が規模が小さい。その他の人間関係を作る原理として契。小学校～大学までの盛んな同窓会。人の移動が激しく、国境を越えた移動も。

3. 言論社会、三国鼎立社会（高句麗、新羅、百濟）

言論社会を支えるソンビ（士）精神、反権力的精神。知識人の時局宣言（救国宣言）、

	日本	中国	朝鮮・韓国
前近代	サムライ精神	士大夫精神	ソンビ（士）精神。中国の士大夫とも異なる
近代	官僚の精神とサムライ精神 サムライ精神による政治主導の困難？	官僚と政治家の未分離？科挙の伝統。強い中央集権	官僚と政治家。政治主導はソンビ精神。政治家は官僚を軽く見る

4. 王権、臣下の争いを超越した超越者＝神の必要

市民たちの良心宣言：神（ハヌル）の内在化と心の結合＝良心

II 個別化の契機が強い理由

1. 宗教的、政治的求心点が不明確

・日本：『古事記 kojiki』（8世紀初）、民族の古典、宗教組織（神社）、宗教的・政治的結集点としての天皇制。

・韓国：『三国遺事』（13世紀末頃、僧侶の一然〈イルヨン〉編纂）、韓国全体の建国神話の檀君神話は分量が少ない。

『三国史記』（官撰歴史書 1145年、金富軾〈キム・ブシク〉編纂）には全体の開国神話である檀君には割註に一行記述があるのみ。

檀君神話の宗教組織も弱く、宗教的、政治的結集点の檀君の後裔は不明。

檀君の子孫不明。檀氏ではない。そのため各自が「我こそが民族の太陽」と自称。

『三国遺事』『三国史記』は、三国（新羅、高句麗、百済）から始まり、統一国家の形成を志向。特定の一国家の正統性の論証が自明の前提となっておらず、三国鼎立が歴史記述の比較的初期の段階で支配的記述。

韓国は三国鼎立。統一国家形成は、日本（645年：大化の改新）より遅い（統一新羅形成 668年）。

2. 複数の外敵に包囲された独特の国際環境

統一新羅形成過程では新羅が唐を、百済は日本（＝大和朝廷）を引き込み、新羅と唐の連合軍が百済と日本の連合軍を破り、高句麗を挟撃し統一国家形成に成功。複数の外敵に包囲されているという国際環境が、ある地域が外国勢力と結び（＝同盟政策）、力関係を逆転できる可能性をもつ。半島内の争いが国際関係に連動。（日本・中国の国際環境との差異）。一旦統一国家を形成しても、意に反して服属させられた地域の指導者たちは、外勢と結び反撃を試みる。世界では歴史段階を超えて事例は多い。（例：内戦のカンボジア、アフガニスタン、ユーゴスラビア）。

但し、それにもかかわらず三方向からの外敵に囲まれ強く統一国家を志向。遠心力と求心力、分権化と集権化が緊張を孕みつつ併存。

3. 遊牧民的気質。檀君神話での東漸過程

◎檀君神話概要

『三国遺事』が引用するが現存していない「朝鮮古記」によれば、桓因（桓国の表記もあ

り、桓因は帝釈天の別名である)の庶子である桓雄(かんゆう)が人間界に興味を持ったため、桓因は桓雄に天符印を3つ与え、桓雄は太伯山(現在の妙香山)の頂きの神檀樹の下に風伯、雨師、雲師ら3000人の部下とともに降り、そこに神市という国をおこすと、人間の地を360年余り治めた。その時に、ある一つの穴に共に棲んでいた一頭の虎と熊が人間になりたいと訴えたので、桓雄は、ヨモギ一握りと蒜(ニンニク)20個を与え、これを食べて100日の間太陽の光を見なければ人間になれるだろうと言った。虎は途中で投げ出し人間になれなかったが、熊は21日目に女の姿「熊女」(ゆうじょ)になった。配偶者となる夫が見つからないので、再び桓雄に頼み、桓雄は人の姿に身を変えてこれと結婚し、一子を儲けた。これが檀君王儉(檀君とも記す)である。

檀君は、堯(ぎょう)帝が即位した50年後に平壤城に遷都し朝鮮と号した。以後1500年間朝鮮を統治したが、周の武王が朝鮮の地に殷の王族である箕子を封じたので、檀君は山に隠れて山の神になった。1908歳で亡くなったという。

(紀元前2333年が檀君紀年元年)

◎分析

一 西から東への移動する3000人の戦闘集団である遊牧民が白頭山付近で定着。

二 部族構成 支配階級

天孫降臨一族 → 熊をトーテム(象徴)とする部族 → 虎をトーテムとする部族

→ この下に更に被支配階級

三 神と人間の関係

1. 神が人間となる 例) イエス最底辺の人間に生まれたゆえすべての人間の罪を贖える

2. 人間が神になる。独裁者誕生。 ナチス 現人神(日本)

イエスの生まれかわりと自称するキリスト教牧師たち。 韓国

3. 人間と神の協同。桓雄と人間(熊女)が結婚し檀君誕生。檀君は神で人間。

神	神	神
↓可能	↑不可能	↓ 両者の協力
人間	人間	↑ (協同創造)
		人間

四. 桓雄の下降がもつ歴史的な意味

1. 3つの国

桓国(^{ファンクク}因) → 桓雄は桓国の庶子。桓雄当時に国。桓雄神市国(^{ファンウンシン シンクク})と呼ぶ。この桓雄神市国の理念がすなわち在世理化・弘益人間。 → 桓雄と人間(熊女)が結婚し檀君誕生。檀君は神で人間。檀君朝鮮

桓雄は嫡子ではない。→遊牧民的末子相続?

※高句麗の王位継承: 嫡長子でない事例多い

※李氏朝鮮王朝建国時：李成桂 先妻：5人の男子。

後妻（先妻と同時期）：2人の男子、世子を後妻の末子に。先妻の末子、李芳遠が世子を殺し世子に。

2. 歴史事実

桓国→ 桓雄の下降と在世理化・弘益人間の実現は実在した歴史が神話化。新疆ウイグル自治区にある天山の天池→今の白頭山の付近に移住してきた一団の遊牧民族。天山と白頭山の地形的な条件、白頭山という名前。天山の最高峰を「ボゴダ」（博格達）。ボゴダはモンゴル語で聖山・神山・神霊・霊山・白山など。そしてその峰の下には巨大な自然湖水である天山天池。ボゴダは万年雪を戴く山であり、モンゴル族にとって白色は光明と純潔を意味。

桓雄とその一団は、古に何らかの理由でここ天山の天池のほとりを離れ、他の場所へと移住をはじめ、東へ東へと移動し、遊牧地帯、農耕地帯も通過。桓雄の集団は定着と移動を繰り返し、聖なる神山であるボゴダを連想させる巨大な自然湖が山頂にある今の白頭山付近に到着した後、そこに定着。この白頭山を「ボゴダ」と呼び、ボゴダは発音の似た「パクトル(박달)」に替わり、そしてパクトルは二つの意味、明るい山(밝은 산)という意味の「白山」になり、太白山・白頭山・長白山の名称。檀君は太白山〔白頭山〕で出生した関係最初は「朴達任儉」、パクトルは白達となり、倍達に替わった。檀君は「倍達任儉」となり、檀君を始祖とする民族は「倍達民族」。

五. 桓雄の下降がもつ哲学的な意味

1) 桓雄は民族最初の龍。風伯・雨師・雲師。

- ・中国の龍は昇天し、わが民族最初の龍はそれと反対に、天上から地上へと下降。龍の昇天は個性性を含意し、龍の下降は共同体性を含意。個人が出世、栄達が昇天。た中国では立身出世の関門を登竜門。「龍となって天に登る門」。これと比べて龍の下降は、地上世界全体が変化してよくなることをいう。
→ 神の人間世界への内在化？
- ・遊牧民的な風伯が一番先。農耕民的な雨師・雲師がつぐ。

2) 「如くなる珠」である如意珠は、龍自身とあらゆる人の念願を実現してくれる無限の能力である。桓雄の父が息子に授けた三個の天符印こそ如意珠。

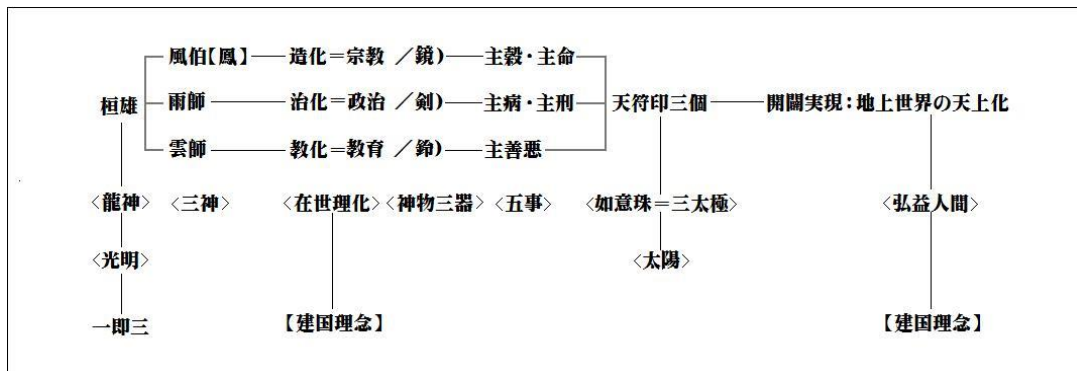
これは桓雄の父と桓雄、そして地上のあらゆる人々の共同の念願である、「在世理化・弘益人間」を実現するために要請される三種類の能力。天符印が内包する意味は「天が保証した能力」。三種類の能力が一つの如意珠に集約、三即一、一即三の論理、三太極

3) 天符印三個とは具体的には造化・治化・教化の能力。在世理化は「人間世界に在りつつ理想的に変化させる」、それを行うためには造化・治化・教化が必要。造化は宗教、治化は政治、教化は教育。

4) 桓雄^{ファンウン}は同時に光明の象徴。如意珠はそのまま太陽。龍であり光明である桓雄^{ファンウン}が天上世界から地上世界へと天下ることで、地上世界はどう変わる？ 地上世界の天上化。弘益人間し得たことは「地上世界の天上化」、「開闢の実現」。

- ・もっとも重要な役割を担う存在が風伯〔風神=鳳〕。風伯は桓雄^{ファンウン}が吹かせる造化の風。
(そうすると雨師は桓雄^{ファンウン}が下す治化の雨、雲師は桓雄^{ファンウン}が投げかける教化の雲)
- ・風伯・雨師・雲師は、桓雄と一即三、三即一の関係。

5) 地上世界の天上化、開闢を可能ならしめた桓雄の下降構造。



六. 遊牧的文化が農耕文化を主導

◎北方的、遊牧民的性格。

- ・龍神〔龍鳳〕信仰・開闢信仰・山岳崇拜信仰。
- ・風伯は風神であり鳳で、北方遊牧民の鳥トーテム。

風は北方遊牧民のダイナミックで活発な气的特性を代弁。風伯は神風^{シンバラム}、北方遊牧民の気質である風流気質と相通ずる。風は二重の意味。

- ・三神信仰。桓雄の父・桓雄・檀君の三神は三神^{ハラボジ}翁、風伯・雨師・雲師は三神^{ヘルモニ}媪。光明崇拜。「桓国」や「桓雄」は「ファンハダ(환하다)」「パルタ(밝다)」「ともに「明るい」という意味、太白山や白岳山の「白」も同じ。古朝鮮の都「阿斯達^{アサダル}」は「朝の山」という意味であり、国号の朝鮮もやはり「朝日の鮮やかさ」すなわち新しさという意味である。

◎南方農耕民的要素。

熊は熊トーテム部族、虎は虎トーテム部族。漁撈と狩猟を含めた原始的な採取農業を主として生きる種族。一か所に定住し農耕文化に近い。龍神信仰は以前には主として農耕文化の産物と認識されていたが、厳密に言えば農耕文化と遊牧文化の二つの要素を同時に有

している。雨師・雲師は農耕を行うのにぜひとも考慮されねばならない気候条件。風雨が順調であることは、農耕を行うために極めて重要。

<孫びょんうく教授の整理>

- 1 共同体性が個性性を主導
- 2 時間が空間を主導。
- 3 感性と野性が知性を主導。
- 4 気が理を主導
- 5 楽が礼を主導
- 6 平等の価値が自由の価値を主導
- 7 開放性と包容性が閉鎖性と排他性を主導。

※補足1；檀君神話は歴史的事実：遼河文明論 中国の黄河文明より 1000～2000 年古く、異なる特徴を持つ、朝鮮半島の文化と共通性の多い遼河文明（現在の中国の遼寧省、内モンゴル自治区にまたがる地域）の発掘により当時の古代国家を反映したものと考えられるようになった。現在砂漠だが当時は温暖湿潤気候

（根拠）琵琶型銅剣、櫛目紋式土器、高句麗の城と同じ構造の城

※補足2：中国の東北歴史プロジェクト → 高句麗は中国の地方政権、と主張。中国の正史全て高句麗を外国伝に。無理な主張。中国の歴史プロジェクトは、高句麗だけが問題ではなく、遼河文明を中国史の始原として組み込もうとしているようだ。

Ⅲ ソンビ（士 선비）精神

一 民本主義、国家の共通善と国王＝国家との分離。臣下たちの活発な言論活動。 民本主義：「民為貴、社稷次之、君為輕」（民は貴し、国家がそれに次ぐ、君主は軽い）（『孟子』）

二 世襲的身分の観念と高い倫理的生活態度

朝鮮では身分を超える上昇可能な科擧制度があるが、士族（兩班）は特権的世襲身分に近い。士族、中人（庶孽、郷吏）、良人、賤人という四大身分が存在し、尊貴観念が強い。中国では生まれつきの身分は無いと広く意識されていた。士に相応しい読書をし、士に相応しく無い賤業（商工）には手を出せない。一人の「棄儒就商（工）」は一族の破滅。中国では兄弟で官人と商人になったり、商人の子供が高官になることもあったが、朝鮮王朝では絶対に有り得なかった。

前近代の身分観念

日本	朝鮮・韓国	中国
科挙無。身分原則固定 士農工商 士=武士 商は最下位、賤しい お金があると変化	文武科挙試験あり。 不完全で不正多し 士農工商 士=文人（ソンビ） 士族が世襲化、身分化 国王力が弱く、士族が強い。 商は最下位、賤しい 士は商業をしない	文武科挙試験あり。 不正には厳罰、一族皆殺し 士農工商 士=士大夫 約 60 年で上下の身分の入れ替わり。 皇帝の力が強い、臣下は弱い。 商は最下位。だがあまり低くない

三 学者（ソンビ 선비）と教育者に対する高い尊敬。政治と学問・道徳との亀裂。

【中国】「君主、父」への尊敬。師は違う。科挙官僚は政治的、経済的、知的、道徳的価値の独占者。教師は科挙に合格できない2～3流の知識人。

先生は、先に生まれた＝年上者の意味

【朝鮮】「君、父、師」の三身一体

文科挙に应试しない士族が多数出て、書院に集まり儒学の研鑽に励む。在地士族が道徳的、知的権威の点で中央官僚に優位する現象が起こり得た。16世紀李退溪の聖学十箇「第三小学図」に中国儒教史では見いだし難い「立子弟授受之教」項目。

5月15日先生（師匠）の日

※中華人民共和国が9月10日を教師の日と制定しているが、教師があまり尊敬されない状態が望ましくないため制定されたようであり、韓国とは事情を異にする。

毛沢東の文化大革命＝反知識人、農村へ下放。

国会議員の2～3割 大学休職、以後大学に復職する。大学が自主的に決定。

【台湾の事例】：国会議員の半分近くが大学教授出身。大学教授が政治家になるために経路になると学生は教員を尊敬しない。韓国は3分の1にも満たない。

IV 東学の天主、神

・至氣

【原文】至氣今至、願爲大降（지기금지, 원위대강 : チギクムジ、ウォニテガン）

【訳文】至氣が今こそ至って、天主が大いに天からくだ下られることを願います

【原文】侍天主、造化定、永世不忘、萬事知（시천주, 조화정, 영세불만, 만사지 : シチョンジュ、チョファジョン、ヨンセプルマン、マンサジ）

【訳文】造化を定めて末代まで忘れず万事を知らしめられた、天主を侍します

・天主、神の人間への内在化

「吾心即汝心也。」

(上帝が)答えた。「吾の心は、すなわち汝の心である。人がどうしてこれを知っていようか。

・「侍者、内有神靈、外有氣化、一世之人、各知不移者也」

【訳文⑩】『侍』とは、内に神靈があり、外に氣化があり、世の人々が各々そのことを知って確信することである。

『東経大全』（水雲・崔濟愚著）

1. 布徳文

【原文⑤】不意四月、心寒身戰、疾不得執症、言不得難状之際、有何仙語忽入耳中、驚起探問則、曰「勿懼勿恐、世人謂我上帝、汝不知上帝耶」。問其所然、曰「余亦無功故、生汝世間教人此法、勿疑勿疑」。

【訳文⑤】（そうこうしているうちに）不意に4月、心が寒く、身が^{おのの}戦き、病氣になったが、病名もわからず、言葉も出にくかった時、ある仙語〈神秘的な言葉〉がふと耳の中で聞こえた。驚いて起き上がり、尋ねてみると、（天主は）「怖がるな、恐れるな。世人は我を上帝と謂う。汝は上帝を知らないのか？」と言う。（崔濟愚が）そのわけを尋ねると、（天主は）「余はまだ功がないので、汝を世に出して人々にこの法を教えようと思う。疑うな、疑うな」と言う。

2. 論学文

【原文④】举此一不巳故、吾亦悚然只有恨生晚之際、身多戰寒外有接靈之氣、内有降話之教。視之不見、聽之不聞、心尚怪訝、修心正氣而問曰「何為若然也」。曰「吾心即汝心也。人何知之。知天地而無知鬼神、鬼神者吾也。及汝無窮無窮之道、修而練^{アツ}之、制其文教人、正其法布徳則令汝長生、昭然于天下矣」。

【訳文④】

これら（奇怪な説）を一つ一つ挙げてみてもきりがないので、私もおびえていた。ひたすら晩世に生まれたことを恨んでいたところ、身体にひどい^{おかん}悪寒が走った。外には靈に接する氣配があり、内には（上帝の）降話の教えがあった。視（み）ようとしても見えず、聴（き）こうとしても聞こえず、心ではまだ怪しんでいたが、修心正氣して尋ねた。

「どうしてそうなのですか」。

(上帝が)答えた。「吾の心は、すなわち汝の心である。人がどうしてこれを知っていようか。天地を知りえても、鬼神を知ることはできない。鬼神とは吾である。汝は修練して窮まりなき道に入り、文を著わして人に教え、法を正して徳を布け。そうすれば、汝を長生きさせよう。徳を昭然と天下に布くのだ」。

【原文⑤】吾亦幾至一歲修而度之則、亦不無自然之理、故一以作呪文、一以作降靈之法、一以作不忘之詞、次第道法猶為二十一字而已。

【訳文⑤】私はほぼ一年にわたって繰り返し修練し、自然の理が備わった。そこで、呪文と降靈の法と不忘の詞を作ったが、道法の実践は、まずもってただ21字を誦^{とな}えることになる。

二十一字

【原文】至氣今至、願爲大降（지기금지、원위대강：チギクムジ、ウオニテガン）

【訳文】至氣が今こそ至って、(天主が)大いに天から下^{くだ}られることを願います

【原文】侍天主、造化定、永世不忘、萬事知（시천주、조화정、영세불만、만사지：シチジョンジュ、チョファジョン、ヨンセブルマン、マンサジ）

【訳文】造化を定めて末代まで忘れず万事を知らしめられた、天主を侍します

【原文⑨】曰「降靈之文、何為其然也」。曰「至者、極焉之為至。氣者、虚靈蒼蒼無事不涉無事不命。然而如形而難狀、如聞而難見。是亦渾元之一氣也。今至者、於斯入道、知其氣接者也。願為者、請祝之意也。大降者、氣化之願也」。

【訳文⑨】（賢士曰く）「降靈の呪文は、どういう意味でしょうか？」

（崔濟愚曰く）「『至』とは、これ以上ない究極のものをいい、『氣』とは虚靈であり、蒼蒼（草木が青々と生い茂るさま）としていて、あらゆることに関係し、あらゆることに宿命づけるものをいう。しかしながら、形については形容しがたく、聞こえはしても見えにくい。果たせるかな、渾元^{こんげん}（天地）は一氣である。『今至』とは、己がこの道に入って氣に接したことを知ることをいう。『願為』とは請い願って祈ることであり、『大降』とは氣化を願うことである」。

【原文⑩】「侍者、内有神靈、外有氣化、一世之人、各知不移者也。主者、称其尊而與父母同事者也。造化者、無為而化也。定者、合其徳定其心也。永世者、人之平生也。不忘者、存想之意也。万事者、数之多也。知者、知其道而受其知也。故明明其徳、念念不忘則、至化至氣至於至聖」。

【訳文⑩】「『侍』とは、内に神靈があり、外に氣化があり、世の人々が各々そのことを知って確信することである。『主』とは、その(天主の)尊さを称えて、父母と同様に事^{つか}えることだ。『造化』とは、無為にして化すことだ。『定』とは、氣の徳と合一して心を定めることだ。『永世』とは、人の平生（一生）だ。『不忘』とは、想いを存^{たも}つという意味だ。『万事』とは、数が多いことだ。『知』とは、道を知り、その知を受け入れることだ。ゆえに、徳を明らかにし、念（おも）いを忘れなければ、化に至り、氣に至り、至聖に至るのだ」。